

あ の 時 き の “ ち ょ っ と い い 話 ” 、 今 ま さ に 進 ん で い る “ 新 し い 取 り 組 み ” 。 北 海 道 医 療 大 学 が 、 こ れ か ら 未 来 へ 向 か う 姿 を 探 る た め に 、 本 学 の 歩 み を “ 知 る 人 ” 、 “ つ く る 人 ” に 、 お 話 を う か が っ て い け ます 。

職種という枠にとらわれず、 その人のために考えてください。

アメリカのNPに憧れて。

卒業して3年目の2003年頃。私は、看護師を続けていくことに悩みをもちはじめました。日本の医療制度や慣習によって、看護師の業務に制限があることに疑問を感じていたのです。

憧れていたのは、アメリカのナースプラクティショナー（NP）。州によって制度は異なりますが、診断や薬剤の処方などを行える上級看護師です。患者さんのニーズを把握し、自らがその場で医療を提供する、地域のかかりつけ医のような存在。日本にもそんな制度があったなら。そう思い描きつつ、現実とのギャップに悩んでいました。

その5年後、日本でもNP教育課程がスタート。医療行為に医師の指示が必要なことは基本的に変わらないものの、診療看護師（NP）という日本NP教育大学院協議会による認定資格が誕生しました。医療大の大学院も2010年に道内唯一のNP養成コースを開設。2019年、私は同コースを修了し、診療看護師の資格を取得しました。NPに憧れて約16年。ようやく理想の医療人をめざすスタートラインに立てました。

21の診療部門を擁するNTT東日本札幌病院で、私は診療看護師としての活動を開始したばかりです。大学院で身体診察学や薬理学、病態生理学などをより深く学んだ診療看護師は、いわば看護師と医師の両方の専門性を持つ存在。とはいえ、道内に約20人、当院では初となります。そこで私は、大学院在籍時から、診療看護師とは何か、当院の医療サービスにどのように貢献できるのかを、医師や看護管理者、事務長などと検討。自らの業務に関する規約や、修了



卒業旅行は、同期の男子学生9名でバリへ。写真前列右から2番目が岡村さん。男子学生の存在は、かつて看護の道を志すきっかけとなり、今もなお、看護の可能性を模索し続けるモチベーションとなっている。

後の院内研修に関わる規定を作成し、それに基づいて各診療科をローテーションしています。

現在は糖尿病内分泌内科で、主に2つの業務に携わっています。ひとつは、糖尿病がありながら他の科に入院する患者さんに対して、医師とチームを組み、血糖管理などをタイムリーに行うこと。もうひとつは、当院をはじめ受診する外来の患者さんに対して、医療面接や身体診察を実施しアセスメントを行うことです。患者さんの声を聞きながら診断・治療に必要な情報を収集し、医師と共有。よりスムーズに医療サービスを提供できます。また、看護師の視点から、患者さんの社会面・精神面なども把握。患者さんにとっても、医学的知識を深めた看護師がじっくり話を聞いてくれることで、安心して治療に臨めます。そう思っていただけの方は想像以上に多く、診療看護師になって良かったと実感しています。

人のつながりと、看護の力。

私はもともと、看護師志望ではありませんでした。文系で首都圏の私立大学を受験しましたが、結局は浪人。その2年目、軌道修正のヒントを探るため、高校時代の友人たちに大学の話を聞きました。中でも気になったのが、医療大の看護です。人間学や社会学も学ぶと聞き、一気に興味深い学問に。医療大の友人は、さらに、男子学生を紹介してくれました。男性でも看護師になれると知り、仲良くなった男子学生は私の先輩に。今でもその交流は続いています。

学生生活で力を入れたのは、サークル活動。看護福祉学部の学生が中心の集まりをつくりたいと思い、キャンプやスキーなどを楽しむサークルを結成しました。当時の仲間は現在、大学教員、訪問看護師、社会福祉法人理事、そして、私と同じ診療看護師などとして全国各地で活躍しています。勉強面では、同期の仲間に救われてばかり。仲間の好意に応え、一緒に合格したいという思いは強く、何とか看護師になりました。

決して真面目な学生ではありませんでしたが、人のつながりという財産を得た4年間でした。現在は、看護学科同窓会の副会長として交流会などを運営。オープンキャンパスにも参加し、高校生の素朴な質問に答えています。積極的に協力

岡村 英明さん

（看護福祉学部看護学科4期生）

看護師、診療看護師（NP）。2000年、本学看護福祉学部看護学科を卒業後、愛心メモリアル病院、北光記念病院を経て、2010年からNTT東日本札幌病院勤務。集中治療室（ICU）や心臓外科など、急性期医療の現場を中心に経験を積む。2008年、本学大学院看護学研究科博士前期課程修了。2016年には診療看護師（NP）をめざして再び同大学院へ入学し、2019年、NP養成コース修了。本学看護学科同窓会副会長も務める。



するのは、人のつながりが大切だからです。

医療大のつながりがなければ、私は看護師を辞めていたかもしれません。勤務4年目、思うところがあって退職を考えていた頃、スキーで足を骨折し、富良野の病院に入院しました。知り合いのいない環境で、身体を洗うことさえできず、大好きなスポーツも「できなくなっていいや」と自暴自棄に。身体とともに心も汚れていきました。そんな中、札幌からお見舞いに来てくれたのは、男性看護師の仲間たち。私の様子を見て、「岡村、頭が臭いぞ」と洗髪を手伝ってくれたのです。すると、世の中がパッと明るく見えました。洗髪は看護の基本。たったそれだけで、失っていた気力や希望、プライドを取り戻せたのです。そのとき、看護の力をもっと追求しようと決心しました。

怪我を乗り越えた私は、新しい職場でキャリアを再開。看護という学問を深め、後輩へのより良い指導につなげたいという思いから、2008年、医療大の大学院へ。さらに深く看護学を学びました。2016年には、いよいよ診療看護師をめざして2度目の大学院入学。学びたいと思ったとき、応えてくれる環境はいつも母校にありました。

いつも患者さんのそばで。

私にとって医療とは、病気があっても、いかにしあわせに生きていくかを考えること。どれだけ医療が進歩しても、病気はなくなりません。病気を治すだけではなく、患者さんと一緒に、より良い生き方とは何かを考えるのが大切だと思います。

今、医療人に求められることは、より高度で複雑なものとなりました。ひとりの専門職では解決できないことも増えています。チーム医療の必要性が高まる中で、もともと患者さんのそばにいる看護師は、医療のコーディネーターとしての役割が期待されていると思います。それは、どんな職場でも、業務内容でも同じではないでしょうか。

もっというと、患者さんにとって職種は関係ありません。看護師という枠にとらわれず、その人に必要な最善の医療を、タイムリーに提供できることが私の理想。それを追求したひとつの結果が、診療看護師という立場でした。これから、ともに看護の可能性を広げていける仲間が、医療大から現れることを楽しみにしています。